



# 神苑の決意

主張

## 折口信夫と琉球・沖縄―沖縄への「視線」を考える―

「神苑の決意」 主筆 木川智

本号の内容 「主張」折口信夫と琉球・沖縄―沖縄への「視線」を考

える―(木川智)：1 / 【解説】辺野古新基地建設の問題点と「共謀罪」(西山徹)：3 / 【連載】アジア放浪記―歴史を掘り起こし日本を見る①(仲村之菊)：6 / 【連載】『倭姫命世記』を読み解く⑥―中世の皇位継承論―(柳凜)：8 / 活動報告：10 / 花瑛塾日誌：16 / 編集後記：16

頒価：1部 1000円  
(別途送料 160円)

当誌では、TOKYO MX「ニュース女子」を始めとする沖縄基地問題に関する本土の偏見を取り上げてきたが、その偏見の根底には、本土の沖縄への差別意識があるだろう。

沖縄戦で沖縄守備を任務とした日本軍第三二軍においても、沖縄への差別意識が充ちていた。例えば、ある日本兵の発言として「沖縄ではゴキブリを食べている」、「沖縄人は日本のために人柱になれ」などの発言が残っている。こうした差別意識が、沖縄戦という極限状態において、軍による住民虐殺やスパイ容疑での処刑、強制集団死(いわゆる集団自決)などを招いた一因であることは疑いない。

本土による沖縄への差別意識は、いまなお残る。記憶に新しいところでは、高江へりパッド建設の警備に当たっていた大阪府警機動隊員による反対運動参加者への「土人」や「シナ人」といった発言は、まさしく差別意識によるものである。

現在ですらこうしたことから、戦前における本土による沖縄への差別意識は大変なものであったと想像できる。

### 折口信夫と琉球・沖縄

そうした中で、戦前の芸術家や言語学者・

民俗学者など一部の人たちは沖縄をたびたび訪れ、熱心にその歴史や文化を学び、沖縄の人々と交流を続けた。その代表者として民俗学者・折口信夫を取り上げたい。

折口は大正一〇年、同一二年、昭和一〇一一年と生涯三度沖縄を訪れ、「琉球の宗教」、「琉球国王の出自」、「同胞沖縄の芸能の為に」など琉球・沖縄を扱った多数の論文を執筆した。特に組踊など沖縄の芸能の保存に力を入れた。さらに折口の沖縄への関心は並々ならぬものがあり、「琉球新報」(旧紙)や「沖縄日報」といった沖縄の地方紙を郵送で購読していた。歌人・釈迢空としても数多の沖縄の